

「真相を広める会」の出発点は、宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんが、毎日新聞OBの山野井孝有さんと出会った時からです。1985年、秋間美江子さんは、コロラドでロッククライミング中に滑落して大けがをした登山家・山野井泰史さんを搬送先病院で看病し、自宅で療養させました。そして、山野井さんに「私の兄・宮澤弘幸は、軍機護法違反のスパイとして検挙され、戦後まもなく事実上獄死した」と伝えました。戦争に対して人一倍危機感を持っている山野井さんは、何としても「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を伝え、広めなければならないと訴え続けています。そんなご縁のある山野井孝有・泰史さん・妙子さんのイベントでした。「真相を広める会」の寺沢玲子さんが参加されましたので、その報告を「事務局たより」号外として、お知らせします。(福島 清)

トークイベント「いのち五分五分」

山野井孝有×泰史×妙子×神長幹雄



2025年7月30日夜、お茶ノ水の「THE TRIBE」で、山野井孝有氏と息子の泰史・妙子夫妻それに孝有氏著書「いのち五分五分」出版に関わられた山と溪谷社の神長幹雄氏が加わり、4人で泰史さんや妙子さんの活動の背景や家族の逸話を話題とする「トークイベント『いのち五分五分』」が催された。

因みに、この場所での講演会で講演者が3人というのは初めてとの事。一般参加者は40名、申込人数を遥かに超えて断られた人も多いという。

はじめに、司会の保科雅則氏よりこの対談実現のいきさつについてのお話があった。泰史さんの所属山岳会（日本登山クラブ）の忘年会で入手した私家版「五

分五分」が非常に興味深かったので、神長氏とイベントを企画、そのために孝有氏の許可を取ろうと接触したところ、対談にも出てくれることに！

神長氏からは私家版「五分五分」を「いのち五分五分」として山と溪谷社から出版するにあたってのいろいろな裏話が語られた。泰史さんもその時その時の逸話を補足する。

泰史さんからは、高校3年三学期に進路指導の事で父兄が呼び出された時の教師への母の受け答えの逸話「高校を卒業する年齢になれば自分の将来は決められる。法に触れたり人に迷惑を掛けるようなことがあれば命を掛けても止めるが、登山家になりたいという本

人の進路は母親であっても手を広げて止める事は出来ない」などが飛び出した。

「自分で山の面白さを見つける」登山スタイルは母親や母の弟の影響が大きい事、父・孝有氏の戦争体験からの反戦の強い思いを感じるとして、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」のための活動等や戸田ノブさんからの聞き取りに通う孝有氏の話が出た。

孝有氏が私家版「振り返れば波乱」「五分五分」「戦争はいけません」等、全て自前で出版していた事や、泰史さんが「俺の講演料が＜一回〇〇万円＞と言われるが、普通の人達が時給千円ももらえないのにおかしいと思わないか」と母親と話していたと知った時には、「息子も母親も真っ当だ、労働者の事を理解している」と嬉しかったと孝有氏。泰史さんが中学生の時に受け入れてくれる山岳会探しに苦労していたのを見て、唯一受けてくれそうだった日本登攀クラブに念書持参で集会に一緒に行くと語る孝有氏。

やはり、＜この両親がいて泰史さんあり＞なのだと思った。そして、泰史さんの連れ合いの妙子さんについては、泰史さんをして「妙子がいなければ、オレはクライミングしか頭にない、社会性ゼロの常識のない者のままだった」「妙子は実の子供よりも両親の信頼が篤い」と言わしめている。生前の母・孝子さんや父・孝有氏にしても妙子さんの人柄にはべたばれしていると感じる。

山野井孝有氏 93 歳、身体は衰えてもまだまだ「反戦」を訴え続ける。

19 時～21 時のはずの対談は熱のこもり方が凄く、途

中休憩を省略しても足らず終了時間も 10 分ほど延長する事に。それが終わっても孝有氏からどうしてもこれだけは言いたい！と申し出があり、「平和の大切さ」と「いのちの大切さ」について訴えた。

司会者は、＜多分参加者に戦争体験者は一人もいない、でも平和やいのちの大切さは引き継いでいかなければならない！「いのち五分五分」は昨今忘れられている親子の絆についてもう一度考えさせられる、まだ読んでいない方には是非とも一読をオススメする＞と閉会の挨拶をした。

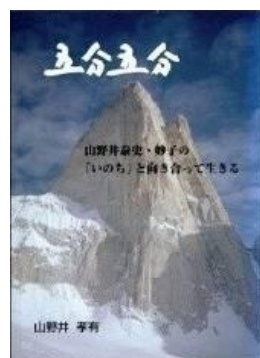
ご存じのように、当日朝 8 時 25 分ごろ、ロシア極東のカムチャツカ半島沖を震源とする大規模な地震があった。震源の深さは 20.7 キロ、地震の規模を示すマグニチュードは当初 8 と発表され、その後 8.7 から 8.8 と訂正。それに伴う津波も当初の＜注意報＞から＜警報＞となり、一時は「中止か」との声も聞こえてきたが、妙子さんが千葉へ孝有氏を迎えに行き（彼女が乗った電車以降は運休に！）、泰史さんは伊豆に住んでいる司会者・保科さんの妹さんに車で小田原まで送ってもらい、その後一緒に小田急で向かった。

この場所 THE TRIBE は「自由で、冒険的で、創造的なクライミングの魅力をクライマー同士で共有し、互いに刺激しあえること」を願って株式会社ロストアローが設立、偶然ながら代表取締役の坂下直枝氏は泰史さんがギャチュンカン事故で入院中お見舞いに来て下さり、高熱に苦しみながらも泰史さんがそれでも話をしたい方であった。

(寺沢 玲子)



閉会后、山野井孝有父子を囲んで。右から、麻生豊、山野井孝有、山野井泰史、山野井妙子、大西和子（敬称略）。撮影＝寺沢玲子



(私家版) 2010 年刊



(山と溪谷社版) 2011 年刊